2011.1.1

月刊通信

はなしがい

第294号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

また内田樹（たつる）さんの本の紹介です。『街場の大学論 ウチダ式教育再生』（2010/12角川文庫）です。四年前に出た『狼少年のパラドクス ウチダ式教育再生論』の増補版です。題名は次のような意味です。

「『狼少年のパラドクス』というのは「狼が来た」という（それ自体は村落の防衛システムの強化を求める教化的な）アナウンスメントを繰り返しているうちに、「狼の到来」による村落の防衛システムの破綻を無意識に望んでしまうことである。」

つまり、内田さんが「狼少年」として、教育の危機を触れ回れば触れ回るほど、それが現実化してきてしまったというわけです。この本には、現場の大学の教員の立場から、大学教育の実情がありありと書かれています。私も大学教育に関わりがあるので、「なるほど、なるほど」と思って読みました。

まず、大学生の学力の現状はこんなものです。

「現在の日本の大学二年生の平均的な学力は、おそらく五十年前の中学三年生の平均学力といい勝負、というあたりではないかと思われる。」

私が教壇に立つ専門学校も同様です。三十年ほど勤めていますが、近ごろ高校卒業で入学する学生たちは、以前の中学卒業生と同レベルに感じられます。

「このままの状態が続いてゆけば、十年後には日本社会は「漢字が読めない、四則計算もできない、アルファベットも読めない、学ぶということの意味がわからない、労働するということの意味がわからない」大量の「元・子ども」を抱え込むことになるだろう。」

●学力が低下する原因は何か？

子どもたちの学力低下が問題になっています。その原因については、学習指導要領や「ゆとりの時間」や教師の指導力などが問題にされています。しかし、内田さんは日本社会の基本的な問題を指摘します。

「なぜ学力は低下するか？　それは「学力が低下する」ことが多くの日本人にさしたる不利益をもたらさないからである。というより、「学力が低下する」ことからかなりの数の日本人が現に利益を受けているからである。」

まず、受験を中心にした教育の状況があります。

「受験は同学齢集団内の競争であるから、絶対学力の低下は現象としては顕在化しない。そして、同学齢集団内だけの競争においては、必ず集団全体の学力は低下する。メンバー数有限の集団における競争においては「自分の学力を上げる」ことと「他人の学力を下げる」とは結果的には同じことだからである。（中略）自分が勉強するより、競争相手の勉強を邪魔する方がはるかに簡単である。」

自分の学力の向上をめざすよりも、相手に合わせて勉強をしないようになっているというのです。

●「無知の知」としての学校の役割

それでは、そもそも学校で「学ぶ」ことの目的とはいったい何なのでしょうか。内田さんの「学力向上」の考えは次のようなものです。

「たくさんの教科を学校が用意しているのは、本来生徒たちに「自分が何を知らないか、何ができないか」を知らせるためである。世の中には自分の知らないことがたくさんあるんだ、と思うことができれば、それだけで学校に行った甲斐はある。」

「「学ぶ」というのは、キーワード検索することとは別のことである。自分が何を知らないかについて知ることである。自分の知識についての知識を持つことである。」

みんなと同じでありたいという他者志向をめざす子どもについては次のようにいいます。

「そういう子どもをこれ以上量産するのを止めたいということを本気で考えている人間がいるなら、その人はまず自分の子どもが「みんなと同じでいなければ、生きて行けないのではないか」という恐怖を感じずに生きて行けるように、ただ一人でも「均質化の圧力」に抗しておのが子の独自性を愛し、育み、守る、というところから始める他ないだろう。」

また、能率よく学んで成果を上げるというような考え方に対しては、次のようにいいます。

「学習を動機づける人間的ファクターの中には「努力に対する将来的リターン」の期待だけではなく、「努力そのものから得られる知的享楽」も含まれる」

●大学の未来と日本の文化

私はこれまで内田さんの本はずいぶん読んできましたが、今回、ハッとさせられたのは、大学そのものの役割についての指摘です。

「大学の統廃合や淘汰が進行すれば、いずれ「無大学県」も出てくるだろう。大学は地域の教育研究の中心であると同時に、図書館、情報施設、スポーツ施設、緑地など多様な文化的機能を担っている。」

今の日本は経済競争にもとづく資本主義の社会です。もちろん、大学も例外ではありません。

「教育を「畢竟、金の問題」と言い切るリアリズムがそのすべてに伏流している。「金で買えないものはない」と豪語するグローバリストと、「弱者にも金を分配しろ」と気色ばむ人権派は、教育にかかわる難問は「金で何とかなる」と信じている点で、双生児のように似ている。」

これまで、大学経営は資本主義の拡大再生産の考えで行われてきました。それに対して、内田さんは「ダウンサイジング」という考えを示しています。

「入学者数を減らし、学生一人当たりへの教育資源の集中度を高め、小さなキャンパスできめ細やかでクオリティの高い教育をすることをめざした建学の理念に立ち返ること。」

日本の経済成長についても、いまだかつてのような「景気回復」を望む人はめずらしくありません。しかし、それはもう時代がちがいます。高度成長を目的にする社会情勢ではありません。

しかし、大学を頂点とする学問には価値があります。それはいったい何でしょうか。内田さんは、「教養」の大切さについてこんな例をあげています。

「リベラルアーツというのは、その自己教育の視点を作るための教育というふうに考えていいのじゃないかと思います。卒業生が転職とか結婚とかの節目のときに、よくやって来ます。そういうときによく聞くのが、「大学時代に教わったことの意味が最近ようやくわかってきました」という言葉です。」

「学ぶ」ことは、生涯つづくものです。学校教育は就職のための手段ではなく、学びの方法を学ばせる場だと言えます。学びかたが身につくならば、人は一生、学び続けることができるのです。

「夢も希望もない」という言葉が流行った時期があります。日本の戦後高度成長の時代が終わったこころの流行語でした。現代も似ています。どうしたら夢や希望を抱くことができるのでしょうか。

オクタビオ・パス（1914-1998）という現代詩人の著書『弓と竪琴』（岩波文庫）が出版されました。以前から名前は聞いていましたが、初めて手にする本です。目次には、ポエジー、言語、リズム、韻文と散文、イメージなど、日常よく目にすることばがあります。いったい、詩人が考えるポエジーやイメージとは、どんなものなのでしょうか。

●ポエジーとは何か？

パスは詩の根本性質をポエジーと呼びます。日本語にすれば、「詩性」とでもいう意味でしょう。「ポエジーと詩（ポエマ）」という章では、いろいろなことばでポエジーについて定義しています。

まず、「認識、救済、力、放棄」の四つをあげます。つまり詩とは、知ること、救いになること、力そのもの、解放されることといったような意味でしょう。この先でも、まだまだいろいろなことばがつづきます。「祈念、嘆願、神明の顕現、悪魔ばらい、呪文、魔術、昇華、無意識の凝縮、民族、国家、そして階級の歴史的表現」とあって、まるでことばのデパートのようです。結論はこうなります。

「ポエジーはこの世界を啓示し、さらにもうひとつの世界を創造する。」

「啓示」の意味は、「①明らかに示すこと、②人の力では知り得ないことを神が教え示すこと。」です。つまり詩は、神にかわって、わたしたちの世界をはっきりと示してくれものであり、しかも、そのほかの別の世界を創造するものだというのです。

今の若者たちは、情報社会、ネット社会といわれるヴァーチャルの世界に生きていて現実を知らないと言われます。しかし、キリストのことばに「人はパンのみにて生きるにあらず」というものがあります。人間は、ただ単に現実の世界に生きるとは限りません。何かもうひとつの世界と切りはなされずに、全体世界と一体化して生きているのです。

2011.2.1

月刊通信

はなしがい

第295号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

●ことばと人間の世界

詩の世界はことばの世界です。世間では、ことばというと、コミュニケーションの手段だと言われます。しかし、パスはちがいます。

「言語に対する人間の最初の態度は信頼であった――記号と表現される対象とは同一だった。」「ことばが乱れ、その意味が不正確になる時、われわれの行為や仕事の意味も同様に不正確なものとなる。」「ことばなくして人間を捕えることはできない。人間はことばによる存在である。」

そして、世界とはこういうものです。「一方には、ことばで表現し得ない現実があり、他方には、ことばでしか表現しえない人間の現実がある。」

人は外界の世界の存在は確かであると思いがちです。だから、ことばではなく物そのものを直接に知ろうとします。手で触れたり、目で見たり、耳で聴こうとします。しかし、より広い世界をとらえるには、ことばの助けが不可欠です。例えば、「アメリカの生活」といえば、実際の生活体験がなくても想像できます。また、人間の精神世界も直接に知ることはできません。すべてがコトバで語られます。だから、「人間はことばによる存在」だというのです。

●詩とは何か

それでは、ことばを手段として書かれたり、読まれたりする詩とは何なのでしょうか。それは、詩と散文とを比較することによってわかります。二つは言語のどんな性質を生かすかによって区別されます。

まず重要なのは、「リズム」という要素です。

「リズムはあらゆる言語形態に本然的に存在するのであるが、詩において初めて完全に発現される。リズムなくして詩はない。」かといって、散文にリズムがないわけではありません。「あらゆる散文の根底には、論理の要請によって希薄になってしまった、目に見えないリズムの流れが巡っている。」

散文の性質は次のようなものです。

「散文はひとつの行進であり、思想や事実の真の理論である。散文の象徴する幾何学的図形は線である。それは直線や曲線であったり、螺旋状やジグザグ形であったりするが、常に前進的であり、確固

たる目標を持っている。それゆえ、散文の原型は論述や物語、あるいは思弁や歴史となるのである。」

文章を書いたり、話をしたりするとき、一歩一歩、「ダレガ、ドウスル」「ナニガ、ドウダ」といったつながりを組み立ててゆきます。地味な思考のすじ道です。しかし、詩のすすみ方はちがいます。

「反対に詩は、ひとつの円、あるいは球体として現れる――それらは自ら閉じる何かであり、自己充足的宇宙であり、そこにあっては、終わりとは、また回帰し、反復され、再創造される始まりでもある。そして、こうした絶えざる反復と再創造こそがリズムであり、寄せては返し、倒れては起きあがる潮である。」

なぜ詩にリズムがあるのかよくわかります。声に出して読むときにもリズムを表現するから感情が高まるのです。パスは詩の読み方について、「韻律はリズムから生まれ、リズムに帰ってゆく」と述べています。日本語ならば、五七調、七五調などが韻律です。俳句や短歌の韻律もそうです。しかし、リズムが基礎だというのです。では、リズムや韻律は、詩の成立とどのような関係があるのでしょうか。

「リズムが詩の中核であると言っても、それは詩が韻律の集積であるという意味ではない。ポエジーに満ちた散文の存在、そして、正しく韻を踏んでいるから、それでいてまったく散文的な多くの作品の存在がこの点をよく示している。」

問題は詩のかたちではありません。まさにポエジーにあるのです。そして、詩は、私たちの生活に、イメージする力をもたらしてくれます。それは生きる希望につながります。詩的であるというのは、生きるための勇気や希望と同じ意味のことばでした。

「星、靴、涙、機関車、柳、女性、辞書、これらはすべて巨大なひとつの家族を構成し、すべてが相互伝達をして絶えず変化する、そして同じ血液があらゆる形態の中を流れ、人間はついにその願望――彼自身――となることができる。詩は人間をその人間の外に置くが、同時に彼の根源的存在に回帰させる――彼を彼自身に戻すのである。」

つまり、私たちはポエジーによって、夢と希望に結びついた現実の世界を生きられるのです。

みなさんは記憶力に自信はありますか。記憶力を伸ばしたいとはだれでも思うことでしょう。「近ごろ忘れっぽくって困る」「新しいことが覚えられない」「どうやったら物覚えがよくなるだろうか」などと私の周囲でもこんな声をよく耳にします。

では、逆にあらゆるものを覚えて忘れないとしたらどうでしょう。そんな人がいると思いますか。じつはいるのです。その人の記憶力を三十年にわたって徹底的に調査をして書かれた本があります。

A・R・ルリア『偉大な記憶力の物語―ある記憶術者の精神生活』（2010岩波書店・天野清訳）です。小説でも読むように楽しく読めます。おもしろく読んで、しかも心理学の勉強にもなります。私もいろいろと学ぶことがありました。

●記憶の仕方のスローガン

まず、そもそも記憶とは何なのか、その基本についてお話ししておきましょう。みなさんはものごとをどうやって記憶していますか。ただただ暗記しようとしていませんか。記憶のメカニズムを知るならば、記憶のコツがつかめます。こんなスローガンがあります。「わかって→忘れて→思い出す」

私の師である大久保忠利が考えたことばです。一度聞いたら忘れません。学術的に言うならば、「記銘→把持→再生・想起」です。「記銘」とは、まさに「わかる」ことです。日本語には「身に染みる」という表現もあります。

まず、「わかる」ことが前提です。そうでなければ決して思い出せるわけはありません。「思い出せない」という人の多くは、そもそもわかっていなかったのです。わかったなら「把持」できます。忘れていいのです。ただし、時どき「再生・想起」します。思い出すのです。それは同じことの繰り返しではありません。思い出すたびに、その時どきの関心によって何かが付け加わります。「論語」にも「学びて時に之を習う、また説ばしからずや」とあります。

●記憶力の秘密

ここまでは、ごく常識的なことです。それでは、私たちは記憶するべきことをどうやってアタマに入

2011.3.1

月刊通信

はなしがい

第296号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

れるのでしょうか。「丸暗記はよくない」と言いますが、はたしてそのまま暗記できるのでしょうか。

そこで天才の記憶の仕方に関心が向くわけです。ポイントは、「直観像」と「共感覚」です。その人の意識では、数字でも言葉でも必ず「直観像」に置き換わってしまうのです。たとえば、数字がタテヨコの一覧表に並んでいればそのまま視覚的な像として記憶されます。その状態を本人は「見える」と言います。また、単純な音を聴いただけで、平行に並んだいくつもの線が赤やオレンジの色で浮かびます。人の声でも、黄色いとか、ひとつの花束のようだとか、色や形が見えるのです。

このようにいくつもの感覚がまとまって感じられることを「共感覚」といいます。「音を聴くと色や形が見えたり、色や形を見ると音が聞こえたり、においを感じるなど、ひとつの様相の感覚が、別の様相の感覚を引き起こす」ものです。

ことばの場合には、視覚像はもちろん、聴覚、嗅覚、味覚などが加わります。「音は、直接的な視覚像をひきおこす。その音は視覚的な特性をもち白色である。また、その音は、塩からい味を持つ」のです。たとえば、レストランで料理の名を聴いただけで味を感じるとか、音楽を聴くと料理の味が変わってしまいます。これが言葉でもはたらくのです。ですから、物語を聴いたときの想像力はじつに豊かです。「商人は何メートルかの織物を売った」という一文から、商店や商人の姿やその織物やそこにいる客の姿までがありありと「見える」のです。

じつはここから、記憶力がありすぎるという悲劇が生まれるのです。言葉を聴くたびに、幼児のころからの思い出にはじまる記憶のすべてが次々に浮かんでしまいます。物語の世界はいつか本筋からどんどん離れていってしまいます。皮肉なことに、記憶力の高さが普通の人以上の困難を生み出したのです。

何よりも困ったのは忘れることができないということです。あらゆることが記憶に残ってしまうので、新しいことを理解するジャマになるのです。私たちが年をとっても古いことは記憶しているのに、新しいことが覚えられないことにも似ています。

また、数学の文章問題などの理解にも問題があり

ます。というのは、あらゆる問題を図像にしなければ考えられないのです。つまり、抽象的な考えかたができないわけです。そもそも、人間のコトバは眼に見えるものをまとめて抽象的に考えることを可能にするのですが、この人はそれができません。

単純な数字がタテヨコに並んだ表のようなものならば、視覚像としてその位置を「見る」ことはできます。ところが、その数字のタテとヨコ同士の論理的関係がとらえられません。見ることで操作しなければならないからです。この事実は、視覚を重視する現代社会の風潮に対する警告にもなるでしょう。

一般の子どもたちは十五歳くらいで視覚像を基本にした具体的な考えかたから、ことばを使う抽象的な考えかたを身につけます。ところが、この人は生涯、子どものような視覚像にもとづく考えでした。ですから、いくつかついた仕事もうまくゆかずに記憶術者として一生を送りました。子どもたちがコトバの力を身につけて抽象的に考えられるようになることの重要性を考えさせられます。

●個人意識の豊かさ

この本の示唆することは、人間の記憶の問題にとどまりません。人間の認識能力や思考能力の根本は何なのかという手がかりになります。そこから、人間にとってどのような能力が必要なのか、どのような教育をしたらよいのかという目標も見えてきます。

私はこの本を最初、図書館で借りました。しかし、これはとてつもなく重要な本だと考えて、あらためて買い直して徹底的に印しをつけながら読み返しました。今、いくつかの事例を紹介しましたが、まだまだ紹介したい事例はたくさんあります。ぜひ、ご自分でお読みになることをお勧めします。

この本全体が人間の心のメカニズムを根本から知るための豊かな知的財産だと思います。何よりもおもしろいのは、この人の発言をそのままのかたちで書いているところです。人がものごとに向きあって、何をどのように考えるのかということがよくわかります。そこから、一人の人間がものごとを考えるということの豊かさと偉大さが分かります。まさに、人間の探求とでも呼びたいくらいの本なのです。

2011.4.1

月刊通信

はなしがい

第297号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

今、日本は歴史的な危機にあります。私たちは何百年に一度という時代に立ち会っています。３月11日の大地震につづく大津波、それに加えて福島原子力発電所の大事故です。原発事故は未だに予断を許さない状況が続いています。

地震発生直後から、私は原発がどうなるのか気になって、毎日、テレビと新聞とインターネットから情報を収集してきました。そして、子どもたちの未来のために、今、重要なことは何か考えました。

●地球環境と原発

先月から一冊の本を紹介する準備をしていました。池田清彦『新しい環境問題の教科書』（2008新潮文庫）です。ここ数年、地球の温暖化が問題にされ、その原因であるＣ02の削減が必要だということがしきりに言われています。また、エコ、エコというエコロジーの根拠にもされています。

私はそんな大合唱に疑問を抱いていました。それが何よりも原発政策推進の重要な根拠にもなっていたのです。「原発はＣ02を出さないクリーン・エネルギーだ」というわけです。

議論の始まりは、1988年のアメリカ上院の公聴会です。NASA（アメリカ航空宇宙局）のジェームズ・ハンセンが「最近の異常気象、とりわけ暑い気象が地球温暖化と関係していることは九九％の確率で正しい」と述べました。翌年、「IPCC（気候変動に関する政府間パネル）」が設立され、何度かの報告があり、2007年の第四次報告が次の内容です。

「地球温暖化の要因の九三％が人為的なものであり、そのうち五三％がＣ02の影響である」

ここには問題がいくつかあります。第一に、温暖化が異常なことなのかどうか。第二に、その原因はＣ02なのかどうか。第三に、Ｃ02の削減はどれだけ効果があるかという点です。

温暖化は特に異常なことではありません。そもそも地球は有史以前から温暖化と寒冷化を繰り返してきました。細かい繰り返しはいくらもあります。

「二〇世紀前半に地球の平均気温がかなり上がったことは確からしい。／しかし、その後、一九四〇年～一九七〇年代には、地球の平均気温は下がってい

るのである。そして、一九八〇年代の終わりぐらいになってから、気温はふたたび上昇に転じている。」

また、C02以外の原因もいくつか考えられます。「「地球温暖化」論自体がウソであると言っている科学者は少なからずいる。あるいは、地球温暖化は事実であったとしてもその主因はC02ではない、と言っている科学者はもっと多い。／残念ながら、そのような意見が全国紙やテレビなどの大きなメディアで取り上げられることはほとんどない。」

結論から言うと、地球の温暖化はないし、C02の影響もたいしたものではないし、C02の削減対策も効果の上がらないものです。

ところが、それが原発推進の根拠にされたのです。1986年のチェルノブイリ原発事故から、一時期、世界は原発推進の見直しがありました。しかし、地球温暖化とC02の削減を根拠にして原発の増設がまた息を吹き返したのです。

●原子力政策と原発

日本の原子力開発は、1954年（昭和29）にスタートして「原子力基本法」が制定されています。アメリカの指導で核武装を目指したものだと考えられています。核兵器の材料であるプルトニウムの製造を目指してのものだったと指摘する人もいます。

クリーンだと言われる原発には重要な欠陥があります。大量の放射性物質を出すことです。「使用済み燃料」という高レベルの放射能を発する物質が残ります。単なるゴミではありません。そこから発電に再利用されるプルトニウムを取り出せます。そのためにつくられたのが、六ヶ所村の再処理施設でした。ほかにも原発のメンテナンスのために作業員が使用した衣服や道具なども低レベル廃棄物としてドラム缶に詰めて残されるのです。

今度の事故でもわかるように、原発から出る放射性物質の量は大変なものです。ヒロシマ型原爆のウランは八百グラムでした。それに対して、事故が起こらずに通常の運転をしていても、原発からは一年間で一トン分のウランが生み出されるのです。

今回、知ったことの一つにチェルノブイリ原発事故の原因として地震が関係あることです。原子炉爆

発の二十秒前に地震があったことが記録されているというのです。公式には運転者のミスで制動できなかったということです。地震の事実はソ連崩壊後まで秘密でした。私は今回の原発事故でも地震による直接の影響があったのではないかと想像しています。

原発は今の日本の発電量の三〇％を占めている。だからやめられないという宣伝もされてきました。しかし、それも正しくないということが証明されつつあります。原発の事故が起こったとたんに東京電力は無計画な「計画停電」を始めました。私はこれはカウンターパンチだと思いました。「原発を取るか停電を取るか」という意味です。

しかし、実施したのは数日のことで、人々が積極的に節電に協力したので、停電なしですむようになっています。なにしろ、東電の管内の原発十七基のうち十三基が停止しているのです。

これまで、原子力発電の稼働率は70％でしたが、水力は20％、火力は48％でした。それで原発が全体の30％を占めていました。ですから、原発をとめても、火力発電の稼働率をあげれば、十分に発電量を増やすことができるのです。それが今、ほんの少しの火力発電の復活で実現されつつあるのです。

●被曝と子どもたちの未来

さて、今、気になるのは子どもたちの命と健康です。原発から放射能が多く飛散したのは、3月12日の第1号炉の爆発と、3月14日の第3号炉の爆発のときでした。今でも融溶した炉心から微妙に出ているようですが、政府や東電の報告ではデータが隠されているようです。もしかして今の原発の状況は処置をしている当時者にもわかっていないかもしれません。それで毎日、効果もアイマイな場当たり的な対策を続けています。それほど原発の技術は危ういものだったのです。

放射線による被曝はないに越したことはありません。国が決めた安全の基準は、ただ名目的に線を引いただけのものです。被曝の影響は年齢が低ければ低いほど重大になります。子どもたちの未来を考えるならば、もうこれ以上の危険を増やすような原発政策をやめさせねばなりません。

３月11日の大震災以来、二か月あまり、とくに原発についていろいろと勉強をしてきました。そして、たどりついた結論は、脱原発とは、私たちの今後の生き方にかかわる基本的な問題なのだということです。つまり、これまでの生活をどう考えて、今後どのように生活するのか、さらに地球をどうするのか、人類の未来をどう考えるのか、最終的には自然と人間の関係といった哲学的な問題まで含んでいるのです。

もちろん、私が原発にあらためて強い関心を持ったのは、今回の大震災による福島原発の事故がきっかけでした。しかし、そこから問題がどんどん広がって行きました。そのきっかけは、数十年にわたって原発に反対し続けてきた科学者の仕事を知ったことです。京都大学原子炉実験所の助教（助手）の小出裕章さんです。原子力についての基本的な問題をを科学的に指摘しているのはもちろん、さらに地球と人類の未来、自然と人間の未来についても深く考えていることが分かりました。

●原子力の専門家が原発に反対する

小出裕章さんは、一九四九年生まれで今年六十一になります。原子力の研究にあこがれて大学に入学したものの、その危険性を知ってから四十年間、原発反対を訴える活動を続けてきました。今回の原発事故で注目を浴びるようになり、その発言は多くの人たちから期待されています。

2010年12月に出版された『隠される原子力・核の真実―原子力の専門家が原発に反対するわけ』（創史社）は今、インターネット書店アマゾンの科学書でベストセラーになっています。私もさっそく買って読んでいます。原子力の基本から原発の問題まで分かりやすく簡潔に書かれた本です。たくさん取り入れられた図表はどれも参考になります。

また、インターネットには、小出裕章さんの日々の発言をまとめて報告するファンのサイトもできました。インターネットを見られる人は、毎日、チェックされるとよいでしょう。マスコミが原発について正直な報道をしないので、今では私の貴重な情報源になっています。

2011.5.1

月刊通信

はなしがい

第298号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

今、この本からひとつだけ、原発を考えるときの基本的な事実をあげておきます。「日本の原発のすべてを停めても電気の供給量は十分に確保できる」ということです。マスコミでは日本の電力の30％を原子力が占めているといわれます。これは実質的な稼動状態のことです。火力発電などは原発を全出力で運転させるために停止させられています。発電能力からいえば原発は18％になります。

●原発の何が問題なのか

私が考える原発の最大の問題点は三つです。正常な運転がされたとしても原理的に危険なのです。

第一は、原子炉に放射能を閉じ込めておくことの技術的な不可能性です。原発は放射能の危険のために実験不可能な技術です。原子炉の技術はほとんど進歩せずに五十年が経過しています。原発推進の立場の人たちは「五重の壁」ということを主張してきました。しかし、今回の福島原発の事故では、①燃料ペレット、②燃料棒の被覆管、③圧力容器、④格納容器、⑤原子炉建屋のすべてが破られました。

第二は、原発から日々、生み出される放射性廃棄物、いわゆる「死の灰」です。発電量100万キロワットの原発は、一日でヒロシマ型原爆三個分の核分裂生成物を生み出します。一年では千発分になります。全国では一年に800トンの核廃棄物を生み出すことになります。これらの廃棄物の処理方法は手のつけようもないものです。いまだに安全な処分方法のないまま蓄積されていくのです。貯蔵される使用済燃料棒だけでも、１万３５００トンになっています。

第三は、日常的に原発のメンテナンスをしている下請け労働者の被曝の危険性の問題です。これについては私たちはほとんど知らされていなかった重要な問題のひとつです。今度の事故では多くの下請け労働者たちが被曝基準の修正のうえで危険な作業を強いられています。全国の原発のメンテナンスのためには七万人の労働者が必要とされています。一年に一度の定期検査でも千人が動員されるのだそうです。それらの労働者の被曝実態はほとんど闇に葬られてきたのです。

●未来の子どもたちのために

そもそも放射能は人間の細胞のDNAに直接作用して遺伝子そのものを破壊するものです。どんなに微量であってもそれなりの影響をあたえます。安全基準というものは、いわゆる「しきい値」であり、「我慢量」なのです。また、その影響は細胞分裂に関わるものですから、からだの細胞の少ない子どもほど影響が大きくなります。

今、福島では校庭や公園で子どもたちが遊ぶことさえ危険な放射能の値が出ています。ところが、それに対して、国や政府は常識では考えられないような大きな値を「安全値」として提示する対策をとっています。それも、おそらくのちのちの保証問題などを考慮した政治的な判断なのだと考えられます。

これ以上の被害を出さないために、そして、放射性廃棄物をこれ以上出さないためにも、まずは原発を停止させることが第一の対策です。フィンランドのドキュメンタリー映画『10万年後の安全』では、今、進行中の作業が描かれています。放射性廃棄物を文字通り十万年以上、保存するために山中の岩盤に埋め込むというのです。

おとなは子どもたちにはもちろん、未来の人びとにも、危険なお荷物を渡してはなりません。少なくとも、これ以上の放射性廃棄物を生み出さないような日本の社会をつくらねばならないと思います。

「豊かな生活」という名のもとに、私たちの暮らしの中に宣伝されてきたものを見つめ直す必要があるでしょう。私たちが暮らしてきた価値観が果たして正しいものだったのでしょうか。

生活のために原発が必要だという人がまだまだいますが、「命あっての物種」ということばもあります。生命と健康はあらゆることの前提です。原発を誘致した貧しい過疎地の生活についても、原発につぎ込まれるほどのお金を直接に投資したらどんな社会ができていたでしょうか。

今、日本は大震災のあとで、さまざまな困難をかかえていますが、単なる復旧ではなく、歴史的な日本の政治と社会と文化の転換点なのだと考えれば、私たちの行動しだいで日本が変わりうるのだと考えることができるでしょう。

３月11日の福島原発事故以来、いろいろな本を読んできて、二人の人に注目しました。小出裕明さんと高木仁三郎さんです。小出さんは前号で『隠される原子力・核の真実』（創史社）を紹介しました。その後、６月１日に『原発のウソ』（扶桑社新書）という本が出ました。「語り口」のあるいい本です。

高木仁三郎さんは、2000年10月に62歳で亡くなっています。生前30年にわたって反原発運動の活動をしてきました。今回、紹介するのは、『市民科学者として生きる』（1999岩波新書）です。自ら遺著と自覚して書いた本です。かつて私は高木さんたちの反原発の運動を知っていましたが、私の偏見から原発のことについて学びませんでした。

しかし、今回の事故をきっかけに図書館で見られる限りの著作を借りて読みました。私の偏見は消えました。反原発とは、日本社会のあり方と人間の生き方とを問う哲学的な問題なのです。それを高木さんの著作から学びました。特に、『いま自然をどうみるか』（初版1985/新訂版1997未来社）では、ギリシャ以来の自然と人間の思想をたどって、未来の自然と人間の関係を論じています。

●「市民科学者」という生き方

高木仁三郎さんは、1938年（昭和13）、群馬県前橋市生まれです。小学１年生で敗戦を体験します。

「国家とか学校とか上から降りてくるようなものは信用するな、大人たちの言うこともいつ変わるかも分らない、安易に信用しないことにしよう、なるべく、自分で考え、自分の行動に責任を持とう」

中学は、群馬大学附属中学校です。前橋は、萩原朔太郎、伊藤信吉など、有名な詩人たちの出身地です。詩を読んだり、友人たちとの交流で文学の感性を育んだようです。高校は、県下第一の進学校である前橋高校でした。そして、1957年に東大理学部化学科へ入学します。60年安保闘争の時代でしたが、特別に政治に関心を持つことはありませんでした。後に原子力研究に関わりますが、大学での専攻は化学でした。４年生になって「核化学」の研究室に入ったのがきっかけで、「日本原子力事業」に就職します。会社について次のような問題点を感じました。

2011.6.1
月刊通信

はなしがい

第299号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

「会社の中では、「個」がまるで見えない。そのことと関連して、意思決定のプロセスがはっきりしない。（中略）本気の議論のないまま、上の意向に従って、あいまいなまま事が決まっていく。決まっていくひとつひとつのことは多くの場合些細なことで、少し疑問があっても上司に逆らってまで反対することはないと思ってしまう。しかし、これを積み重ねていると、決定的な時に容易に反対できない。反対しようとすると一身を賭すようなエネルギーが必要になる。人々は自主規制することで会社に忠誠を誓い、その代償として終身雇用を保証されていく。」

これは後に反原発運動に関わってからの教訓にもなったことでしょう。原発を推進する日本の国家や企業の体質への批判にも重なるものです。

そして、４年で仕事をやめて、東大原子核研究所の助手になります。そこでの体験が核実験による放射能汚染への関心を目覚めさせます。原子核の研究の材料となる放射性元素の収集をしているときです。

「「放射能を測っている」と言うと必ず「え、死の灰はまだ残っているんですか、危なくないのですか」と聞かれる。これには参る。「許容量よりはるかに下のレベルですから大丈夫」と説明するが、「許容量」という概念からして、必ずしも人々に説得力がない。」「「許容量以下……」の説明を人々にしていて、いったい自分はいつから国家官僚の手先になり下がったのか、とつくづく思った。」

そして、大学時代の先生の紹介で、都立大の助教授になりますが、そこも会社と同じようでした。「あいまいな意思決定過程と、この自立を好まない共同体的意識はよく似ていると思った。」

今、「原子力村」と称される原子力関係の「専門家」たちの世界に通じるものです。４年後に大学を辞めます。そうして、「市民科学者」という立場に立つ決意をさせた二つの動機があります。

一つは、成田空港の反対運動への参加です。もう一つは、宮沢賢治の思想との出会いでした。成田闘争では、「実際に空港に反対する農民と話してみて、彼らの志の高さとでも言うべきことに感動した」と言います。そして、「果たして、自分の「学問」は彼ら民衆にとってなにものかでありうるだろうか」

と考えます。そこに宮沢賢治の問いかけ、「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか」が重なって響いたのです。

三通りの道が考えられました。一つは科学者、技術者という特権を捨てる道、第二は、体制の中にとどまって、その矛盾と戦う道、第三は、体制内のポストを捨てたうえで、自前の科学（学問）・技術をめざす道でした。高木さんが選んだのは第三の道でした。それが高木さんの生涯を決めたのです。何よりも大きな仕事は「原子力資料情報室」の設立でした。今回の福島原発事故で、私がインターネットでまず第一に頼りにした情報は、高木さんが亡くなってからも継続しているこの団体の資料でした。

●原発問題の五つの問題点

高木さんがあげる原発問題五つのポイントを要約しておきます。今後のエネルギー問題や人間と自然の問題を考える上で重要なポイントです。

第一、原発と核兵器との切っても切れない関係。第二、放射能が生命と生態系に与える危険性、とりわけ原発の巨大事故の危険の問題。第三、放射性廃棄物が、現代の技術全体に通じる最も深刻な廃棄物問題を象徴している問題。第四、大量消費―大量廃棄社会というライフスタイルの総点検まで含んだ現代社会のエネルギー産業の問い直しの問題。第五、さまざまな差別の問題――原発内作業による被爆が極端に下請け労働者に偏る問題、原子力施設立地が過疎地域に押し付けられる問題、放射性廃棄物が他国、他民族に押し付けられる問題。

高木さんの思想は次のようなものです。「「反原発」は、単に原発反対とか放射能がいやだとか、あるいは「核と人類は共存できない」というレベルの信条を意味しているのではなく、人間の基本的な生き方そのものに関わっているのである。」

残念ながら、福島原発事故以来、この日本はガイガーカウンターを頼りにして、健康を考えなければならないような国になってしまいました。しかし、私は少なくともこれ以上の放射能汚染を広げずに、新たなエネルギーのもとでの健康な生活ができるような国にしたいと思っています。

今回はもう一度、高木仁三郎さんの本を取り上げます。『いま自然をどうみるか』（白水社、初版1985/新版1998）という本です。すばらしい本です。

この本の帯にはこう書かれています。

「根源的エコロジズムの記念碑的名著――旧来の人間中心主義的な自然観からの一大転換を説き、自由と解放の自然観を追及する」

私は今まで高木さんに抱いていたイメージが変わりました。その思想の広がりと深さに驚きました。原発を推進する人たちの視野の狭さとは比較になりません。思想家とか哲学者といいたいくらい深い思索と高い理想に裏付けられた考えを持っています。

●プロメテウス神話の現代性

むずかしい本ではありません。ギリシャ神話から始まります。エピメテウスという神が生き物たちそれぞれにいろいろな能力を与えました。ところが、人間に与える能力を忘れてしまいました。それを見かねたプロメテウスという神が、火を使う技術を盗み出して人間に与えたのです。ここから、人間の持つ技術と自然との関係が始まります。

「人間は火と技術という「神の性質のもの」、すなわち本来の自然の外なるものを与えられて、初めて生きるすべをもった。しかし、そのことによって人間は、他の自然界からみずからを厳然と区別し、自然と向き合って生きる存在となった」

高木さんは、ここに人間の不幸のもとを見ます。

「ここで注目しておきたいことは、プロメテウス神話が、あくまで火と技術を、天から盗んだもの、盗むという邪悪な行為の結果として与えられたものとして捉えていることだ。」

すなわち、「火と技術は、必要悪である」とする人間の自己認識があるのです。いわば、人間はみずからを自然から一度は切り離して、自然と人間とを対置し続けてきたわけです。その考え方はいまも続いています。人間は科学技術によって地球をどんどん変えてきました。今、目の前にある福島原発事故の結果を見ていると、自然に対して人間は取り返しのつかないことをしてしまったと思わざるを得ません。

2011.7.1

月刊通信

はなしがい

第300号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

●自然と人間との共生

ではどうしたらよいのでしょうか。改めて、自然と人間の関わりの原点に立ち帰ることです。ところが今でも、原発推進派には、科学技術の発達のために冒険をしなければならない」という人がいます。しかし、放射能というものは、どんなに科学が進歩しても、人間の技術では取り扱えないものです。

わたしがこの本で注目したのは、生態学的なモデルによる「共生」の原理です。新しい日本を見いだすための原理だと思いました。「共生」による進化のモデルです。

「共生によって互いに他を向上させ合うような形での進化である。しかもそうすることによって、自分だけでなく、自己の外なる生存条件をも安定化させ、向上させていく。この安定化と向上は、種の数が増えれば増えるだけ、基本的には増進されるということになる。」

より具体的には、次のような自然構造あるいは社会構造です。今までのような進化の考えとは明らかにちがいます。

「進化というよりは熟成とか成熟と呼びたいものである。量的な進歩・拡大・強化というイメージではなく、お互いに相互作用しながら質的に向上し、また生存の条件を安定化させる。」

わたしは日本の社会変革がこのようなものになりつつあるのではないかと思えてきました。つまり、これまでの政治変革は国家権力を獲得した人たちによって行われてきました。しかし、ここ数十年、強力な政権は成立しなくなっています。一年ほどで総理大臣が変わってゆく状況です。ずるずると惰性的な変化が起こるだけです。その代わり、国全体が全体主義的に組織されにくくもなっています。

哲学や思想の分野でも、主客一体の面から人間の幸福を考えるものが目立ちます。経済発展を最大目標にした日本の発展という考えも疑問を持たれるようになっています。これまでのような経済成長は必要はないと思います。そのいい例が、今の日本の電力事情です。電力生産量に対する実際の消費量はずいぶん余裕のあるものです。極端な経済成長を前提としないかぎり、大きな電力量は必要ないでしょう。

●これからの課題

この本が最初に出版されて12年後にチェルノブイリの原発事故が起こりました。それを受けて新版には一つの章が書き加えられました。そこでは、人間と自然との共生の問題が取上げられています。

まず、「環境」という言葉を取り上げて、それが人間中心主義の言葉である点を批判しています。

「自然の大きな全体があって、それを構成するあらゆるものが共生することで、その全体が成り立つ、人間はその一構成員に過ぎない。」

人類と自然との共生について、「三つの共生」の問題を取り上げています。

「第一はこの地球上におけるすべての生命の共生、私はこれをエコロジー的共生と呼ぶ。」

「第二は、同時代的な、異なる地域、社会、文化、エスニシティーの間の共生、いわば人びとの共生である。」

「第三が過去や将来の世代たちとの通時代的共生、修用には将来の世代との共生ということである。」

高木さんが特に問題にするのは、第三の共生です。それには三つの問題があります。

（1）有限の天然資源（特に石油などの地下のエネルギー資源）の一方的消費にともなう、資源枯渇の問題。（2）現世代の排出する有害廃棄物をそのまま次世代に押し付けることの問題、（3）修復不可能な環境破壊を残してしまうことの問題。

これらの問題についての解決をめざすのが、高木さんが生涯をかけて歩んだ「オールタナティブな科学」の道でした。今、福島原発では、事故後の処理が数十年にわたるということが発表されました。しかし、隠されていた事実が明確になるという点ではかつての日本の状況とはちがってきています。現代にはインターネットの力があります。

今や情報発信は政府とマスコミだけのものではありません。Twitter やフェイスブックという手段で、多くの国民が情報を発信しています。3月11日以来、本当に日本は変わってしまいましたが、今せめてもの期待は、これまでにない社会変革の可能性があるということです。

2011.8.1

月刊通信

はなしがい

第301号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

３・11の大震災から5か月が過ぎました。福島第一原子力発電所からは、いまだに放射性物質が出続けています。水蒸気として空中に、あるいは水にまじって海へ流れ込んでいます。いったん日本各地へ降下した放射性物質は、野菜や肉や魚などの食品を通じて、放射能汚染を広げています。

３・11を境にして、たしかに日本の自然環境は大きく変化してしまいました。この変化は日本近代の歴史の終局ではないでしょうか。こんなときには、改めて歴史を振り返ってみたくなります。目先の困難にしばりつけられるのではなく、より広い視野に立って日本の行く末を考えてみたいのです。

いったい日本という国は何をやってきてしまったのでしょうか。どうして、「原発」などというとんでもないものに依存して生活を築いてしまったのでしょうか。近代の日本を考えなおすことは、日本が手本とした西洋の思想の批評につながります。自然とは何か、科学とは何か、そして、人間とは何か、これらの哲学的な問題が、原発に対する態度において今まさに問われているのです。

●「反哲学」というもの

木田元『反哲学入門』（2010新潮文庫）は現代の哲学を語る本です。いきなり「反哲学」とは意外に思うかもしれません。しかし、本来、すぐれた書物とは既成の考えをくつがえすものなのです。木田さんは「「哲学」というのは、やはり西洋という文化圏に特有の不自然なものの考え方だ」と言います。「自分のやっていることは、総じて言えば、そうした「哲学」を批判し、そうしたものの考え方を乗り越えようとする作業ではないか」。

そうして、ニーチェを西洋の「哲学」の転換点にある人だと言います。ニーチェというと、「神は死んだ」という言葉が知られています。わたしは言葉だけは知っていましたが、あとで書くようにこの本を読んで初めてその意味が分りました。

木田さんは西洋の哲学史を三つの段階に分けます。

(1)ソクラテス／プラトンあたりからヘーゲルあたりまでのいわゆる超自然的思考としての「哲学」

(2)ソクラテス以前の自然的思考

(3)(2)を復権することによって「哲学」を批判

し解体しようと企てるニーチェ以降の「反哲学」

わたしは当然のように(1)を「哲学」だと思っていました。しかし、それは西洋独特のもので、自然について独自な考えをするものです。「哲学」とはあるものを対象として考えるものです。それは存在するものの全てを対象とします。「「ありとしあらゆるものがなんであり、どういうあり方をしているのか」ということについての考え方です。

「そんなことを考えるのはめんどうだ」と思うかもしれません。確かに、普通の人は、そんなことを意識しません。しかし、私たちの日々の行動の根本には、このような価値観がはたらいているのです。今回の「原発」問題でも例外ではありません。

そもそも、この問題の立て方に、西洋哲学、つまり「哲学」の欠点があるのだと木田さんは言います。

「今、「存在するものの全体」を「自然」と呼ぶとすると、①自分がそうした自然を超えた「超自然的な存在」だと思うか、少なくとも②そうした「超自然的な存在」と関わりを持ちうる特別な存在だと思わなければ、存在するものの全体が何であるかなどという問題は立てられないでしょう。」

つまり、人間は自然のなかに生きていながら、自分を自然から切り離すことによって、自然を対象化しようとしたのです。これがのちに、主観と客観といった二元論の考え方につながって行きます。

このような西洋の考えに対して、むかしの日本人はどうだったのでしょうか。木田さんは言います。

「自分が自然のなかにすっぽり包まれて生きていると信じきっていた日本人には、そんな問いは立てられないし、立てる必要もありませんでした。」

●「なる」から「つくる」への変化

長い間、西洋哲学の中心にあったのは、プラトンのイデア論です。「「魂の眼」でしか見ることができない、けっして変化することのない物事の真の姿」というものを想定しました。いわば「超自然的世界」です。これがのちにキリスト教の「神」の世界と結びつくのも当然のことです。

「自然」をこのようなものと考えると、現実にあるものとのつながりをどう説明してよいかわからなくなります。そこで、人間がイデアの世界を手本にしてものを「つくる」という考えが生まれます。一面では人間の主体を重視する考え方ですが、他面において自然そのものは軽視されます。これものちに「科学」の思想につながってゆくものです。

自然から離れた人間が、ものを「つくる」という思想は19世紀まで続きました。その間、キリスト教の神学においても、プラトン以来の「超自然的な自然」は「神」の世界に置き換えられました。ルネサンスにおいても、「神」に代わって人間が「超自然的な自然」を支配したのです。それが、蒸気機関の技術の発明による産業革命を起こします。ちなみに、「原発」の基本原理は産業革命から少しの発展もありません。熱によって蒸気を発生させて発電機のタービンを回転させるというものです。

そして、ブルジョアジーによる市民革命は資本主義社会の工業化を進めるものでした。その行き着く先が、日本では高度経済成長による自然破壊だったのです。日本人は無意識に自然と共存していましたから大きな抵抗もなく進みました。

●ニーチェの「反哲学」の考え

木田さんは「神は死んだ」というニーチェの宣言を「超自然的な存在」の否定として捉えます。つまり、プラトン以来、人間の「生」から切り離された超自然的な世界を否定したのです。そうして、人間と自然とのすべてが世界となりました。そして、人間の生き方として「力への意志」を唱えました。これは何か暴力的な思想のように思われがちですが、人間と自然との「生」の回復の道すじなのです。仕上げられなかった大きな著作の最終巻は「訓育と育成」について書かれる予定でした。それは教育論です。人びとがニヒリズムから脱却する道、人間が生きるための価値を生み出す道を問うものでした。それは人間の理想とする生き方そのものです。

ニーチェが何よりも価値を置いたものは「芸術」です。わたしが連想したのは、岡本太郎の芸術家としての仕事や生き方です。そんな教育論は、現代日本のような絶望にとらわれた時代に、子どもたちの未来を語るにはふさわしいものだと思います。

わたしは今、年内に刊行する予定の朗読の本を執筆しています。「日本朗読検定協会」の教科書です。

一年ほど前に、責任者からメールが届いて、わたしに頼みたいことがあるというのです。会って話を聞くと、朗読検定によって子どもたちの朗読教育の発展や普及を目指そうとする団体でした。代表者の村山博之さんの誠実な人柄を信頼して、教科書の執筆を引き受けました。そして現在、わたしは日本朗読検定協会の理事の役にもついています。

●現代日本の朗読理論

朗読の本を書くことでいろいろな発見をしました。わたしは以前に『表現よみとは何か』（1985明治図書）という本を出版しています。朗読の表現を発展させるために必要な理論と実践について書きました。当時、朗読の理論は完成されたものだと思っていました。ところが、今回、朗読について学び直してみて驚きました。わたしは買いかぶっていました。

日本の朗読理論は80年ほどの間、少しも進歩していないのです。昭和10年代あたりで停止しています。それどころか、かつて問題にされたことも受け継がれていません。明治の初期の坪内逍遥までさかのぼると、朗読は二本立てで研究されています。一つは、音声についての理論、もう一つは、作品の表現論です。ところが、現代の朗読の本では、表現論はまったく取り上げられていません。また、文を読むならば、当然問題にされる文法にも触れられていません。発声・発音とアクセントくらいで、イントネーションもプロミネンスもほとんど問題にされません。

これは、日本の音声言語の理論の貧しさです。ところが、文字の言葉は重視されています。言葉といえば、まず文字というのが常識です。それで、音声言語は文字から音声への置き換えのように考えられています。しかし、文字をただ読んだのでは朗読にならないのです。今ではおとなでさえ、書かれた文章を読み上げる能力しかありません。それが、日本人の話しの能力の貧しさにつながっています。

朗読の教科書の内容は音声言語教育の見直しにつながります。教科書の仕上がりしだいで、小中学校の子どもたちに朗読の検定を受けさせて、言語教育

2011.9.1
月刊通信

はなしがい

第302号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

に貢献することも、まんざら夢ではありません。

●2音3音の日本語リズム

朗読理論の根本問題が分りました。朗読がつい文字の読み上げになってしまうのは、文字を音声に転換する原理がないからです。音声言語の特徴であるリズムについて説明した本もありません。

そこで私が考えたのが、詩人・吉田一穂が述べた2音3音のリズムです。日本語のリズムは五七調とか七五調と言われますが、リズムとはもっと小きざみで規則的なものです。五七調も七五調もさらに細かく2音3音に区切れます。これが文字を読み上げる読みを音声としての読みへと飛躍させるのです。

例えば、次のような文をどう読むでしょうか。

「メロスは激怒した。」

おそらく文字どおり「メロス／は／激怒／した」と区切るでしょう。ダメです。こう区切ります。

「メロ／スは／げき／どした。」

おもしろいでしょう。しかし、それが音声のことばとしては自然なのです。リズムを取れば「タタ／タタ／タタ／タタタ」となります。

ここからアクセントの原則が出てきます。2音か3音の一区切りごとに一つ強いアクセントがつきます。日本語のアクセントは原則として後ろに置かれて音が下げられます。音楽でいうならアフタービートです。そして、ことばの意味を強める場合には、アクセントは前に出て音が上がります。この例でいうなら、●のついた音にアクセントがあります。

「メ●ロ／スは●／げ●き／どした●。」

「メ」と「ゲ」のアクセントは音が上がって、前後が二つのフレーズになります。

●強弱アクセントと高低アクセント

リズム論がないということは、その根本に強弱アクセントの考えがないということです。リズムは強弱から生まれます。高低から生まれるのはメロディーです。現在、日本語のアクセントは高低アクセントであるといわれますが、わたしは以前から疑問をいだいてきました。日常の生活ではだれもが強弱アクセントで話していますし、テレビのアナウンサーで

すら高低アクセントはほとんど使いません。

今回、わたしが発見したおもしろい論文があります。『NHK日本語発音アクセント辞典』の解説の金田一春彦「共通語とアクセント」です。1966年に書かれて1997年に改稿されています。高低アクセントに疑問をいだいていることがよくわかります。くどいほど「日本語は高低アクセントである」と繰り返しています。また、こうも書いています。

「強弱アクセントの言語では、段は強弱の2種類だけであり、一つの拍の中で、強から弱に変化するということはない。この意味で日本語のアクセントは、高低アクセントでありながら、強弱アクセントのような性格をもつ、ということは言ってよい。」

さらに、アクセントのとらえ方について言います。

「どの拍からどの拍へ移るときに音が上がるかはそれほど重要ではなく、どの拍からどの拍へ移るときに音が下がるかが重要だということになる。」

つまり、単語ごとに傍線を引いてアクセントを表示するよりも、文中の特定の音にワンポイントでアクセントをおくのが合理的だということになります。この考えは、わたしの2音3音区切りのアクセント論にまでつながるものです。

●子どもたちの音声言語教育

わたしは朗読の本に文法を取り入れました。これは画期的なことです。そもそも文部省の指導要領にも文法指導について書かれています。ところが、その教育は貧しいものでした。

今回、出版予定の『朗読の教科書（仮題）』では、文法教育と音声言語の教育と結びつけています。それは教育に大きく貢献するでしょう。子どもたちの音声言語能力を高めるだけではなく、「むかしは子どもだった」おとなにとっても、これまでの音声言語の考え方を改める刺激になるはずです。

これまで学校教育では朗読が宿題として出されて家庭まかせになっていました。もしも朗読検定の社会的な価値が高まって、学校教育でもさかんになれば、まちがいなく日本の朗読のレベルを上げることになります。そして、日本人の音声言語の能力を高めることにもつながると思うのです。

わたしは、最近、人から聞いたことばを丸まる覚えるのではなく、自分のことばで人に話してみたり、文章に書いて表現してみることで、はじめて理解できるのだと実感しています。よくわかりたいと思うことがあったら自分のことばで人に話してみたり、文章にしてみるとよいでしょう。自分がどれだけわかったのかはっきりしてくるものです。

●デッサンとしての「短文」

最近、清水幾太郎『論文の書き方』（岩波新書/初版1959/89刷2010）を読みなおしました。50年も売れ続けているロングセラーです。奥の深いすばらしい本です。文章勉強の必読書です。最初に読んだのは1982年、次に1990年、そして2011年、３度目です。記憶していたのは、「が」を警戒しようとか、文章の攻める面と守りの面などの指摘です。しかし、今回、この本の目的を示す次のことばを発見しました。

「書物を読むのは、これを理解するためであるけれども、これを本当に理解するのには、それを自分で書かねばならない。自分で書いてはじめて書物は身につく。」

今回、とくに関心をもったのは、デッサンとしての短文という考え方です。短文が長い文章を書くうえの基本だといいます。絵画のデッサンのような役割を果たすというのです。清水氏の言う短文とは、大学生のときに書いた文献紹介の１０００字、卒業後に新聞のコラムで書いた６００字の文章です。

しかし、わたしは自分の経験から、もっと少ない文字数の文章が文章の単位になると考えました。その動機は二つあります。一つは、十年ほどつづけてきた文章トレーニングという方法です。もう一つは、ここ一年半ほどインターネットのツイッターで短い記事を書きつづけてきたことです。

文章トレーニングというのは、接続語を利用して文章の論理構成の訓練をするものです。いわゆる「起承転結」の構成ならば次のようになります。

①わたしは……した。（起）②すると、……した。（承）③しかし、……した。（転）④それで/そこで……した。（結）

これに合わせて文章を組み立てます。一見すると

2011.10.1

月刊通信

はなしがい

第303号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

個性のない文章になるのではないか思うかもしれませんが、実に多様な文章が生まれてくるのです。

そして、ツイッターというのは、インターネット１４０字の長さで短い記事を書くページです。文字数が制限されているので、どんなことでも１４０字以内で書かねばなりません。わたしはぎりぎり１４０字まで使って書いてきました。

その結果、書くことばかり考えるのではなく、何が書けないかと考える能力がつきました。たくさん書いてから削るのです。すると、またおもしろいことに、ひとつの記事が完成すると、そこから次につながるテーマが浮かんで書きたくなるのです。

●一段落とツイッター

わたしはこれまでいろいろな文章を書いてきました。小説のような文章では書き出しから一文ずつていねいにじっくり仕上げなければなりません。しかし、そうすると全体の構成に失敗する危険があります。実際に、わたしもそのようにしていくつもの作品を中断しています。

じつは、冒頭から細かい内容を固めていくのはとてもむずかしいのです。全体の構成とともにそれぞれの段落の内容が変わるからです。それでも、文章をじっくり固めながら長い文章に組み立てる方法はないかと以前から考えてきました。どのくらいの単位で文章に集中して書き込むのかという問題です。

それがツイッターの経験によって解決しました。１４０字の文章でも文章の全体を見通しながら、一つの単位として一段落を完成させることができるのです。すると、次の一段落が見えてきます。そうして、次々にまとまった段落が書けるのです。

ツイッターで文章をまとめる基礎となったのが文章トレーニングです。短い文章ではとくに論理が重要です。また、段落と段落とのつながりにも論理がはたらきます。文章トレーニングは、文章の論理力を磨くための訓練になるのです。文章トレーニングで論理の基礎をつくり、ツイッターの緻密な書き込みをすれば文章全体を書きつぐことができます。

どんなに長い文章でも、基本的な単位は段落です。ツイッターの１４０字がちょうど一段落の単位になるのです。文章は段落の単位で小さなテーマを持ちます。もしも一段落でテーマをもった文章が書けなければ、結局、長い文章のテーマも成り立たなくなります。

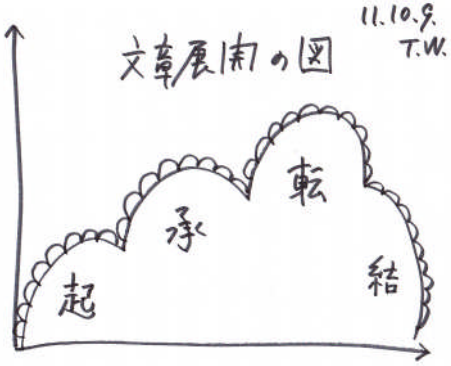
●文章の単位について

わたしは以前に、起承転結の展開について、レース編みのような図柄を考えたことがあります。大きな起承転結を半円で考えて、起承転結のそれぞれがさらに細かい半円で展開するという発想です。４つの半円を太鼓橋のようなかたちに並べて、その半円に細かい半円をつけてレースのように縁どった図です。下に示した図をご覧ください。

問題はその細かい半円の単位がどんなものになるかということでした。今回、それがツイッターの１４０字だということを確信しました。その考えかたで、いま実際に本の原稿を書いていますが、確かに効果があります。そして、ツイッターにこれまで書いた文章がトレーニングになっていたのだと気づきました。本の一ページはほぼツイッターの記事の３つ分です。一段落がきちんと書けていないと、次の段落が見えてきません。

わたしは、今回の本の読み方についても考えて見ました。どうやら、わたしは以前には大きな半円ばかり読んでいたようです。しかし、今回は小さな半円も読み取れたような気がします。それで、文章の書き方について発見することができたのでしょう。

文章を読むときにも、文章を書くつもりになれば理解が深まります。まず、一段落に注目することから始めてください。一段落を読んだら、自分のことばで言い換えてみるのです。口に出してつぶやくのです。あるいは、人に話すのもいいでしょう。わかりたいことは自分のことばにしてみる――これが教訓です。まさに「千里の道も一歩から」なのです。



2011.11.1

月刊通信

はなしがい

第304号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

仕事で大阪に行って必ず立ち寄る古本屋で、内田義彦『学問への思索』（1974岩波書店）を手に入れました。以前から内田さんの本はいろいろ読んでいます。どれもおもしろいものです。内田さんの人格というか性格がよく表れています。1989年に亡くなったのですが、なぜか内田さんと呼びたくなります。

学ぶということが楽しみであり、人生そのものであるということが感じられるのです。いわば、本音の見える本です。どうして、そんな文章が書けるのか、今回の本からその秘密がほの見えた気がします。

この本はエッセイ集です。エッセイを書くことの二つの目的があとがきに書かれています。

「社会科学への足がかりとか拠点を散策のかたちで探り固めておきたかったこと、日本語で考え、日本語で表現する勉強を身につけておきたかったこと」

「勉強」という言葉が内田さんの基本態度をあらわしています。一般に勉強というものは、何かの手段のように考えられています。たとえば、進学のための受験勉強であったり、会社の昇進のための勉強です。しかし、内田さんはそう考えてはいません。

「私は研究という言葉よりも勉強の方が好きです。」

「知ることで自分の拠点とでも言うべきものをつくりたい。そういう気持ちで勉強していました。」

「自分の拠点」とはおもしろい言葉です。生きがいとか、アイデンティティーとか、自分の探求とか、いろいろな言い換えが可能でしょう。今、カルチャー教室などに通う人たちにも言えます。仕事を退職した人や子育てののちに時間の余裕のできた人たちが、必要に応じてではなく、学ぶことを楽しんでいます。

●「学ぶ」ことと「楽しみ」

教育も同じです。子どもたちに楽しく学ばせたいというのは、ほとんどの教育者の願いでしょう。しかし、なかなか理解されていないようです。

内田さんは、子どもが言葉遊びで「ロウドウシャ」と「デンシャ」とをまとめる発想をほめています。そこに、記憶力、抽象力、構想力、表現力を見ています。ところが「教育」はそんな能力を否定します。

「認識作業そのものの素晴らしさに打たれる感覚をもたずに、認識の結論だけを○×方式でとらえて、

ロウドウシャとデンシャをいっしょくたにする馬鹿があるかなどといっている」

内田さんは「教育」での「遊び」の要素を幼稚園に見ています。その良さは、「遊び」と「勉強」が機械的に分けられていないことです。「学ぶ」ことそれ自体に「学ぶ楽しさ」があるといいます。そこで獲得される認識の方法と能力とが、「研究」と「教育」に生きるというのです。

●基礎に立ち返る勉強

それでは、勉強はどのように進めるのでしょうか。第一にあげるのは、基礎の重要性です。

「小中学校で習ったことを、それはそれとしてそのままにしておいてその上に――それとは別個に――新しく高度なことを勉強するんではなく、すでに習ったことを動員しなおして基礎に据えるということです。」

その例が、体操や柔道などでいう「自然体」です。

「訓練は「自然体」という体位での自然体からはじまるが、高段者あるいは達人にしてはじめて獲得しうるのが自然体である。」

わたしは朗読の発声法について原稿を書き上げたところなので、まったく同感です。朗読の結果として耳に聞こえるのは声なのですが、その基礎はじつに単純なことです。体を沈み込ませて発声することです。これを基礎にしない限り、どんなにがんばっても口先だけの声になってしまいます。

「学び」のおもしろさというのは、このような基礎から考え直すところにあるのでしょう。人生の日々や日常生活は同じ事の繰り返しのように見えます。しかし、あらゆることを基礎に返って考えてみると、新たな発見があるわけです。

また、内田さんは人生の細部を大切にします。

「音楽は全体として分らなければならぬものですね。しかし、その全体はたとえばカスタネットの打ちかたがどうだとかそういう細部の解説を通じてしか見えてこない」

わたしたちが人生で出会うものは、世界中のもののほんの一部です。一期一会というほどです。その中で私たちは、自分の考えを育んでいます。自分が

たまたま出会った偶然のものを手がかりに人生の全体を生きるわけです。

●文章を書いて考える

内田さんは出会った人やものから全体をつかもうとしています。内田さんの専門は思想史で、おもに経済学の視点からのものです。しかし、文学、演劇、クラシック音楽などの分野の経験からもものごとを考えます。それが自らの教育と直結しています。自らの歴史の学び方をこう振り返ります。

「歴史の先生について歴史学の基礎を教わるだけでなくて、歴史という科目に即しながら、いろいろの――一見歴史に関係のない――思考訓練を身につけたにちがいありません。」

さらに、厳密に考えるために、内田さんの関心は日本語、とくに日本語で書くことへと向けられます。

「どうしたら日本語で社会科学の勉強ができるか、という問題を考えさせられている。」「私は日本語の文脈で社会科学的な思考を推し進めうるようになることが、社会科学の成立に必要であると同時に、日本語の成立にとっても絶対に必要だと思う。」

内田さんは、「研究」と「教育」それ自体の中に「学ぶ楽しさ」があるといいます。ところが、現代では、「遊ぶ」ということが俗化された概念になっています。その代表がテレビです。おもしろいと思わせようとすることがすべて裏目に出ています。あらかじめ準備されたゲームのようなものばかりです。

「遊ぶということは、学問とか教育とかには関係ないもののように思われ、あるいは取り扱われている。遊び自体、本当は創造的なものですね。これまた人間本性の現われとして。遊びでの訓練だってきびしい、もし、遊びが創造的なものであれば。ところが、その遊びが受動的なものになってしまっている。だからだらける。だらけたものが遊びとされる。」

たしかに、今の社会は何らかの力を必要とするものが回避される傾向にあります。食物を口に入れて噛む労力すら削減されようとしています。しかし、内田さんは文章を書くことを通じて考え続けました。その結果、作品としての考えが本のかたちで残ったのです。わたしは内田さんに心から感謝します。

日本語の能力といったら何を思い浮かべますか。まず漢字だと思いませんか。学校でも国語の勉強と言うとまず漢字の書き取りテストです。漢字検定というものも大人気のようです。漢字を知っていれば知識があるというように思われがちです。それほど日本人は漢字にとらわれています。

日本語では、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字の四種類の文字が使われています。その中でも漢字は別格です。しかし、漢字は数万字もありますから、今では「常用漢字表」を定めて、役所やマスコミなど公の場面で使われる漢字を二千百三十六文字と定めています。

ほかの多くの国では、二〇から三〇くらいの文字であらゆるオトと言葉を表わして生活しています。それなのになぜ、日本ではわざわざ二千を超える数の漢字を使うようなことをするのでしょうか。

●漢字が日本語をほろぼす

はたして漢字というものが日本人のことばの力を高めるために役に立っているのでしょうか。そんな疑問に答えてくれるのが、田中克彦『漢字が日本語をほろぼす』（2011/5角川新書）です。

ショッキングなタイトルですが、たしかにそうだと納得できます。わたしは、この本を読んでから、日本語の文字について根本的な改革が必要だと思うようになりました。自分の書く文章でも、さらに漢字の使用をへらそうという気になりました。

この本の中で、わたしがなるほどと思ったのは、漢字がものを考えることをジャマしているということです。ことばというのは文として意味をもつものです。話も文章も基本的には文です。漢字はいわば文の部分品なのです。それなのに漢字によって次のような事態が起こります。

「漢字の利点は、ことばをとびこえているから、字をおぼえれば、それが直接概念に結びつく。だから中国の学問は、漢字をおぼえ、それを並べて解釈することに終始するという性格をおびる。というのも、漢字ははじめから、概念を与えてしまっているからである。」

文章をていねいによむということがおろそかにさ

2011.12.1

月刊通信

はなしがい

第305号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX.03-3445-6499　振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

れています。学校の国語の試験も、ていねいに文章を読まなくても、文中の語句を拾い出すだけで回答できるような問題です。また、日本人が外国語が苦手だったりするのも漢字が関係あるというのです。

「日本人が英語のみならず何語をやっても、外国語の上達において決定的に見劣りするのは、ヨーロッパ語などを学ぶときにさえも、まるで漢字・漢文を読みような具合に文字をたどっているだけで、ことばそのもの、つまり、オトとしてのことばはまったく素通りしているからである。」

漢字がこれほど使われている国は、日本のほかにはありません。韓国はハングル文字を使っていますし、本家の中国でも漢字は簡略化されています。中国の周辺でも、モンゴルやチベットでは漢字ではない文字を作ることによって文化を進めてきました。

そもそも問題なのは、漢字は日本語ではないということです。むしろ、ひらがなで表すものが日本語なのです。漢字は表意文字として使われるのであって、絵文字に日本語のよみがなをつけて理解するようなものです。ところが、漢字には知的な権威があります。ことあるごとに多く使われるような傾向があります。若い親たちは子どもの名前には漢字を割り当ててつけています。その一方で、声のことばがおろそかにされています。たとえば、テレビの字幕です。少し聞き取りにくい発言や方言などが語られると、すぐに文字で表示されます。声のことばを聞き取る能力はさらに低下することでしょう。

●権力者のものとしての漢字

どうして日本では漢字が取り入れられてきたのでしょうか。日本の近代化の歴史と関係があります。

「日本の近代は、ラテン語にあたる漢文・漢字を禁ずるどころか、明治時代は、せっかくはじまっていた「民族のことば」すなわちヤマトのことばを見捨てて、ひたすら漢字によって近代の諸制度が必要とする概念をとり入れ、漢字を得意気にふりまわす官僚、時には学者を育てて日本を支配した。この結果何が生じたか、漢字・漢文を知るものとそれを知らないものとの間に深いみぞを設け、近代的な日本語共同体の造成に、永遠の分断のタネを植え込んだの

である。」

現代の日本でも漢字は、どこか権威を背負ったものとして学ばれています。声のことばで話しをすることよりも、漢字をたくさん使った文章を書くことのほうが知的なものであるというように思われています。ですから、ますます声のことばというものが軽視される傾向になってゆきます。

わたしは文学作品を声に出して表現する活動をつづけてきました。最近、ますます音声のことばの重要性を感じています。人はことばを声に出すことによって理解するのです。それが人がコトバを使うことの根本的な意味です。もしも、声に出さず黙って文字を見て意味を理解するというやりとりをつづけていたら、人はしだいに話しをしなくなります。最近の学生たちが、むやみにおとなしいのは、そのあたりに原因があるような気もします。

また、「読書ばなれ」ということが言われますが、これも文字としての書物をあたえれば解決するわけではありません。文字が声となって理解されるということばのはたらきの根本を考えねばなりません。

声のことばは、日常のコミュニケーションに限られません。文章を読むときにもことばはオトのイメージとして浮かぶのです。ところが、漢字によってオトのイメージが奪われる危険があるのです。

「漢字で書かれた言語、略して「漢字言語」、もっとくわしく言えば「漢字方言群」「漢字言語群」と言うべきであろう。それぞれの言語（あるいは方言）が漢字で書かれることによって、オトということばの実体を消し去り、かくし去ったことによって、かぶせられた文字だけが残ったのである。この点から言えば、漢字は、「ことばかくし」、「ことば消し」、さらにすすんで「ことばつぶし」の文字だと言えるだろう。」

世間には、漢字が知識そのものであるかのような幻想があります。しかし、わたしたちが日常やりとりする声のことばこそ、わたしたちの考えなのです。やさしいことばで、やさしくものごとを語れるというのが声のことばの特徴です。あらためて、あなたも目を閉じて声のことばに耳を傾けてみたり、自分の考えを声に表現したりしてみませんか。